

令和6年度「学生ボランティア団体活動レポート」優秀レポート一覧

【優秀レポート】 22件

(応募順)

番号	大学名	ボランティア団体名	タイトル	活動分野
1	大分県立芸術文化短期大学	めじろんおおいた見守り隊	地方から全国に貢献できるサイバー防犯ボランティア ～学生の力で安心・安全なネット社会を～ *	その他(防犯)
2	中村学園大学	薬膳・食育ボランティア部	能登半島での炊き出しボランティア *	地域連携(交流) 被災地支援
3	西南学院大学	西南学院大学 ワークキャンプ部	ボランティアがつくる地域、人とのつながり	福祉 地域連携(交流)
4	帝京大学	ボランティア団体 わんちーむ	繋がり広がる支援活動	福祉
5	武蔵野大学	MURP	私たちから見る地域、人とのつながり	福祉 地域連携(交流)
6	西南女学院大学	ちゃれんじ	自分自身が楽しんでボランティア活動に参加すること	福祉 地域連携(交流)
7	東洋大学	東洋大学公認サークル ”学ボラ”	「繋ぐ」ということ ～ボランティアと地域～	地域連携(交流)
8	崇城大学	SERVE	BLSを通じたSERVEの地域貢献	その他(救命)
9	明星大学	おもいやりサークル SMILY	子どもに「居場所」を提供するサークルを目指して	地域連携(交流)
10	畿央大学	災害復興ボランティア部 ほ～ぷふる	災害復興ボランティア部としての活動 ～そして今後につなぐために～	環境 地域連携(交流) 被災地支援
11	早稲田大学	早稲田大学学生NPO 環境ロドリゲス	環境ボランティアと可能性 *	環境
12	聖学院大学	そよかぜ	「ただいま」を拓く	地域連携(交流) 被災地支援
13	関西大学	学生団体 KUMC	地域イベントと防災の共生	地域連携(交流) その他(防災)
14	青山学院大学	学生団体 Youth for Ofunato	学生と地域住民の協働 ―現地活動からの学び―	地域連携(交流) 被災地支援
15	上智大学	Summer Teaching Program Cambodia (STPC)	カンボジアの未来をつなぐ2週間 *	国際交流(途上国支援) その他(英語教育支援)
16	法政大学	法政大学ボランティアセン ター学生スタッフ チーム・オレンジ	能登半島地震における復興支援ボランティア	被災地支援
17	中央大学	中央大学ボランティアセン ター公認学生団体 面瀬学習支援	コロナ禍の経験を踏まえ、新たなステージへ	地域連携(交流) 被災地支援
18	山形大学	Team 道草	地域とTeamになる	地域連携(交流)

番号	大学名	ボランティア 団体名	タ イ ト ル	活動分野
19	東北大学	東北大学陸前高田 応援サークル ぽかぽか	「東日本大震災から13年、今もなお『被災地』支援ボラ ンティアに取り組むのはなぜか。」*	地域連携(交流) 被災地支援
20	立命館大学	立命館大学学友会 登録団体 natuRable	環境教育という名の懸け橋	環境
21	佛教大学	社会連携センター 学生ボランティア室	ボランティアコーディネートをするために	福祉 環境 地域連携(交流) 被災地支援
22	札幌学院大学	まちおこし研究会	小樽の地域連携コミュニティ・町内会を活性化する！	地域連携(交流)

\*を付したものは特に優秀なレポート(以下にレポートを掲載)

## 「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	大分県立芸術文化短期大学
団 体 名	めじろんおおいた見守り隊

タイトル：地方から全国に貢献できるサイバー防犯ボランティア  
～学生の力で安心・安全なネット社会を～

大分県立芸術文化短期大学では情報化社会に適応するための情報モラル教育に力を入れています。その一環として2013年に学生によるサイバー防犯ボランティア「めじろんおおいた見守り隊」が発足し、以降、私たちは安心・安全なネット社会に寄与するために、大学でサイバー防犯ボランティア活動を行っています。この活動では、メンバーが大分県警察サイバー犯罪対策課から委嘱を受け、サイバー空間のパトロール活動（違法薬物の売買等、犯罪に繋がる投稿の発見と通報）等を通じて安心・安全なネット社会に貢献しています。また、近年は活動範囲を拡大し、悪質な著作権侵害（海賊版）への対応やオリジナル啓発アニメの創作など、特色を活かした活動を展開しています。

2013年 発足（以降、SNS上の有害な投稿をパトロールしてIHCに通報する活動を継続）

2022年 悪質な著作権侵害のパトロール「IPサイバーパトロール」を開始

2023年 一般社団法人コンテンツ海外流通促進機構（CODA）と連携プロジェクトを開始  
警察庁「令和4年度サイバー防犯ボランティア広報啓発コンテスト」最優秀作品

2024年 警察庁「令和5年度サイバー防犯ボランティア広報啓発コンテスト」最優秀作品

主な活動内容は、(1)ネット上の違法・有害な投稿をパトロールしてIHCへ通報、(2)ネット上の悪質な著作権侵害コンテンツをパトロールして業界団体（一般社団法人コンテンツ海外流通促進機構（CODA））に情報提供、(3)大分県警察のイベント等でサイバー犯罪対策に関する啓発活動、(4)サイバーセキュリティに関する広報啓発動画の制作、(5)その他、です。

(1)は月1回程度行っています。SNSなどをパトロールして、犯罪に繋がる投稿を見つけ、それをインターネットホットラインセンター（IHC）という機関に通報するというものです。違法薬物の売買や、犯罪に使われる携帯電話や銀行口座の売買など、SNSには危ない投稿もたくさんあります。これを通報することで、IHCが内容を精査し、場合によっては都道府県警に情報提供され、犯罪の未然防止につながるという活動です。犯罪に関する投稿では、隠語が使われることが多いため、隠語をもとにX（旧Twitter）などのSNSを検索します。違法な投稿が本当に数秒ごとにたくさん出てくるので、ガイドラインに触れるものを発見して、そのURLをコピーして通報します。また、年1～2回程度、私たちだけではなく大学全体に広く呼びかけ、サイバー防犯ボランティアの体験会を実施しています。通報実績は年間1,000件を超えるようになりました。

(2)も月1回程度行っています。こちらは指導教員の野田先生が著作権などの知的財産の専門ということもあり、悪質な著作権の侵害についてもパトロールしようという全国初の活動です。音楽、漫画、アニメ、映画など、私たちの大好きなコンテンツを守るために、一般社団法人コンテンツ海外流通促進機構（CODA）と連携して、ネット上の著作権侵害についてもパトロールを行っています。

(3)は不定期に年2～3回程度行っています。大分県警察のイベントでは専用のブースを設営し、ネ

ットの安全利用について呼びかけています。最近では、デモ端末を使って、来場者の方々にサポート詐欺や偽ショッピングサイトを体験してもらい、対処方法を説明しています。実際に、被害にあいそうになったことがあるという声も多くあり、啓発活動の重要性を実感しています。

(4)について、令和4年度に先輩たちが、警察庁のサイバー防犯ボランティア広報啓発コンテストで全国1位の最優秀賞を受賞しました。フィッシング詐欺のテーマで30秒の啓発動画を作るというコンテストでしたが、先輩2名が自分たちでフィッシング詐欺について調べ、解決策を考え、イラスト、シナリオ、BGMなどすべてオリジナルのアニメ作品を制作しました。その結果、全国のサイバー防犯ボランティア団体の中から見事、最優秀賞に選ばれ、完成した動画は警察庁公式YouTubeチャンネルで公開されたほか、全国の運転免許センターなど警察関連施設で1年間上映されました。そして、令和5年度は私たちがこのコンテストに応募し、2年連続全国1位の最優秀賞を受賞しました。有志7名がチームを組んで、ID・パスワードの管理についての30秒啓発アニメを制作しました。夏休みに警察庁のお題が出てからシナリオの検討を始め、絵コンテで動画の道筋を作成していきましました。当団体の強みであるキャラクターデザインやイラスト制作、動画編集を年末ギリギリまで本当に頑張りました。そして見事、最優秀賞を2年連続で受賞することができました。警察庁で表彰式が行われたほか、大分県警察本部長に受賞の報告を行い、本部長から感謝状が授与されました。

(5)について、令和6年7月に行われた一般財団法人日本サイバー犯罪対策センター(JC3)主催の「第2回フィッシングサイト撲滅チャレンジカップ」に挑戦し、フィッシングサイトのテイクダウンに貢献したほか、1名のメンバーが「情報共有部門」で個人表彰されました。

私たちは以上のようなボランティア活動を通して、ネット社会に潜む犯罪や危険を常に実感しています。普段目にしないような危険な書き込みもキーワードの隠語を入れただけで多く表示されることから分かるように、本当に身近なところに危険があります。サイバー犯罪の脅威や情報セキュリティの重要性を、講義だけではなく肌で感じられることは、ボランティア活動を通じて得られる貴重な知見だと思います。そして、そのような犯罪に繋がる投稿を少しでも減らし、安心・安全なネット社会に寄与しようと努力と工夫を行っています。サイバー防犯ボランティアは、大分にいながら東京の薬物取引を通報するなど、地方にいても全国の犯罪の未然防止に貢献できる点にやりがいを感じます。さらに著作権侵害パトロールについて全国初の取り組みが注目され、警察庁のコンテストでは2年連続全国優勝するなど、サイバー防犯ボランティアならではの活躍ができることも魅力です。

一方、誰の目にも触れるところに危険が潜んでいるということは、インターネットを使い始める若い年齢のうちから情報教育をしっかりする必要がありますと考えます。私たちは啓発活動にも力を入れていますが、ブースを担当する警察のイベント等では、若い世代が来てくれることが少なく、もっと若年層に届くような啓発活動に力を入れていくことが今後の課題だと感じています。

サイバーセキュリティの問題は行政・警察・公益団体・民間企業も力を入れていますが、私たちが行っているボランティア活動は、「自分たちの利用するインターネットの安全は自分たちで守る」というコンセプトだからこそ、行政や企業とは違う形で社会に貢献できると考えます。また、情報化社会の諸問題について自分の力で考え課題解決をするという取り組みは、大学での学びにも通じるものがあり、大学生に適したものだと思います。

私たちには活動資金が無いため、交通費の支給や必要な備品の購入などもできない点が切実な課題ですが、今後も地道な活動を継続しながら、新しいことにもチャレンジしていきたいです。

## 「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	中村学園大学
団 体 名	薬膳・食育ボランティア部

### タイトル：能登半島での炊き出しボランティア

薬膳・食育ボランティア部は、2016年に発生した熊本地震からNPO法人の方との炊き出しの活動が始まりました。2024年1月1日に発生した能登半島地震に関し、食を提供する人がいないことを知り、被災地支援を行うことを決めました。

炊き出しは2年生を中心に、薬膳科学研究所の教員や助手、学生がチームを組み約1週間ずつの交代制で実施しました。献立は、顧問の三成教授が熊本で行った炊き出しの経験を踏まえ、安心安全なレシピを考案してくださいました。それだけでなく、今回のために衛生管理マニュアルを作成してください、衛生管理を徹底したことで、被災者の方々へ安心・安全な食事を提供することができました。

【できたこと】衛生面では、食中毒を発生させないように、衛生管理マニュアルに沿ってできる限りの衛生管理を行いました。ただし、被災地ではすべてマニュアルどおりに行うことはできないため、食中毒を起こさないことを第一に、メンバーで遵守事項を決め、徹底しました。

調理面では、シチューやスープだけでなく、福岡の郷土料理であるがめ煮や名古屋のどて煮、能登の方と共同で能登のちらし寿司も作りました。狙いとしては、炊き出し料理に変化を持たせ、他の地域の郷土料理を食べることで辛い日々の中に、楽しみをもたらせること、共同で作ることで、長い避難生活や慣れない仮設住宅での暮らしの中で、少しでもふれあいの場を設けたいという思いで行いました。

また、今回の炊き出しはNPO法人のメンバー・高校生・教員と学生と、立場や年齢がさまざま異なる方との共同作業となりました。調理の面では、管理栄養士の卵である私たちが主体となって指示を出していかなければならなかったため、しっかりコミュニケーションを取り、効率よく作業を進めていくことの大切さを実感しました。

配食面では、温かい食事の提供を心掛けました。2月から3月にかけて炊き出しを行ったため、能登はまだ気温が低く、雪も降っていました。出来上がった料理は保温食管に入れ、温かい状態で提供しました。電気がまだ通っていない地域もあったため、温かい食事は大変喜んでいただけました。

配食は、持ち帰りやすく洗い物を出さないように料理を一品ずつビニール袋に入れて渡しました。食事を提供する際は、笑顔で元気よく話すことを心掛けました。

また、配膳時に大人の方々は、鍋に残っている量を確認して、「少なめで」、「足りませんか」など心配そうにする様子がかがえました。そのため、「まだたくさんあるよ、近所の人にも配ってね」といった声掛けを行い、遠慮せずに食べてほしい気持ちを伝えました。

【できなかったこと】調理機材や食材の調達、水の確保、人員、一日2食提供などの面から、一回に100食分しか提供することができませんでした。

食材は限られているため、なるべくごみを出さない調理を行う必要性を感じました。また、温かい食事を提供するだけで精一杯となり、栄養面が十分に考慮された食事の提供をすることが難しく感じました。今回初めて炊き出しを経験し、調理や配食の流れがなかなかつかめず、配食時間に遅れることがあったため、調理作業工程を見直し、今後はより多くの方に食事を提供できるようにしたいです。今回の経験を活かし、今後は栄養面・心理面・地域の伝統的な味（料理）の三つの面を考慮した食事提供を行いたいと思います。

【得られたこと】調理面では、限られた資源（水・食材など）や慣れない環境の中で、臨機応変に対応する力をつけることができました。食材がないため献立を急遽変更する、在庫の食材のみで調理を行う、急遽配食先が決まるといったことがあったため、どのような状況でもすばやく指示を出して時間内に調理をする必要性を実感しました。一汁三菜の提供は難しいとしても、主食のみではなく、主菜一品・汁物をつけることで、野菜やたんぱく質を摂取することができ、不足しがちなビタミンやミネラルを補給することができるため、炊き出しのできる調理のバリエーションを増やす必要があると学びました。

衛生面では、大学で学んだ衛生管理の知識をそのまま行うことはできないため、場面に応じた対応力が必要であると学びました。食中毒を出すことはあってはならないため、衛生管理は炊き出しを行う上で最も重要視すべきだと改めて思いました。

配食面では、温かい食事の重要性や人とのつながりの大切さを感じました。配食先では、雪が降っている中でも多くの方が並んで待っており、何度も「ありがとう」と感謝の言葉をかけてくださいました。炊き出しを行った地域は高齢者が多かったため、話し方や早さに気をつけ、目線を合わせて料理を手渡しました。炊き出しとなると、決まった料理を提供することが一般的ですが、食事を選択できるようにすることで、選ぶ楽しみを生み出すことができました。今回は、おでんやご飯の種類を選ぶ工夫をしました。どれにしようかなと悩まれていて、自然と会話が生まれ、温かい雰囲気を作ることができました。配食の量としては、被災地の方はどうしても身体活動量が減ってしまうため、たくさん量を提供するのではなく、食べることのできる量を提供することの大切さを学びました。

なにより、実際に被災地へ行き、現状を自分たちの目で確認し、支援を行っていく必要があると痛感しました。インターネットやテレビの情報だけでは得られなかった現状を把握し、ボランティアの重要性を改めて実感しました。炊き出しを通して、人とのつながりの大切さや、助け合いの精神を学びました。

【得られなかったこと】初めていった土地ということや、地域ごとの被災度合いが把握できず、どの地域が特に炊き出しを必要にしているのか分からないため、支援が十分に行えなかった部分があります。

【これからの果たす役割】この活動で被災された方々を元気づける以上に、私たちが多くのことを学ばせていただきました。街並みやライフラインの復旧だけでなく、心の復旧も重要だと感じ、食事を通して、被災地の方との新たなつながりが生まれ、心が温まることを実感しました。

今回、得たものをさまざまな人に発信し、もし災害が起こったときに部としても個人としても支援ができるようにしていきます。ボランティア（調理）マニュアルを世間にもっと普及させ、多くの人がボランティアに参加できる機会を作っていくことが大切であると思いました。

以上のことから、菓膳・食育ボランティア部は、今年度“炊き出しイベント”という炊き出しする経験がある人を増やし、地域のネットワークをつくることを目的としたイベントを開催する計画をしています。

炊き出しボランティアでは、安全でおいしい食事を届けることが一番です。そのためには、衛生管理や栄養面、配食する際の盛り付けの工夫・コミュニケーションの取り方、限られた資源の中で調理することなどさまざまな視点から考慮して調理しなければなりません。しかし、現実には炊き出しを行う機会はほぼゼロに等しく、被災してから初めて実施することになります。私たちがそうであったように、経験がないまま行うのはとても難しいため、避難訓練のように炊き出しの練習を行う機会を増やして、福岡で災害が起こった際に少しでも知識や経験がある人増やしていくことを目的として活動していきます。

また、これまで行ってきた、地域活動もより一層力を入れて行っていきます。

以上

## 「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	早稲田大学
団 体 名	早稲田大学学生 NPO 環境ロドリゲス

タイトル：環境ボランティアと可能性

環境ロドリゲスは、1997年12月4日に設立された早稲田大学最大の環境サークルです。ロドリゲスとは、もう絶滅してしまった「ドードー」という鳥が最後まで生息していた鳥の名前です。私たちはそのロドリゲス島のような豊かでかけがえのない自然を大切に受け継いでいくために、7つの企画を運営して環境問題の解決に貢献しています。各企画が海や教育、商品開発などのテーマを持ち、環境教育イベントの開催、ビーチクリーン、廃材活用商品の販売など、活動は多岐に渡ります。

ここでは私が所属する「やまなび」を紹介します。やまなびは、環境×里山をテーマに活動している企画です。定期的な活動として、独歩の森、高尾の森自然学校、埼玉県吉見町での森林整備活動や畑ボランティアが挙げられます。また長期休暇には合宿として千葉県長柄町での森林整備活動も行っています。これらの活動を通して得られたことは、楽しむための創造力です。森林整備は肉体労働が多いためしんどさを感じることもあります。しかし、苦勞する面も受け入れつつ、創意工夫をしてボランティアを楽しんできました。高尾の森ではとれた木材で楽器を作って森の音楽祭を開催し、子供たちと演奏しました。これにより、子供たちに楽しみながら自然に触れる機会を提供すると同時に、自分たちも楽しむことが出来ました。また長柄町では伐採した竹で台や皿、箸を作り、皆で流しそうめんを楽しみました。イベントを企画立案する、資源の活用方法を考えるなどの創意工夫により、森林整備が単なる辛い作業では無くなり、自発的に楽しんで活動できています。

また環境ロドリゲス全体の活動を通して得られたものもあります。それは多様な視点です。ボランティアで出会う人は長年林業に従事する方から、環境教育のイベントで出会う子供たちまで、老若男女様々な方がいます。多くの方々と接することで、環境に関する知識はもちろん、環境問題への向き合い方や価値観に触れる事ができ、視野を広げることに繋がりました。またサークル内でもメンバー間で交流し、それぞれの活動へのアイデアや熱意を共有する機会が多くあります。例として、9月に行われる地球感謝祭が挙げられます。今年はゴミ分別指導に加え、サークル全体を6班に分けて出店をしました。そこでは主に子供たちに向けてのアクティビティを提供するため、何をテーマにするか、どのような方法で子供に興味をもってもらうか等を一から班で話し合い、準備、出店を行いました。その結果、企画が違うメンバー間での交流や、達成感の共有が出来ると同時に、各々のアプローチ方法から新たな発見をすることが出来ました。このような機会を通して多くのメンバーと交流することで、多様な視点を得ることが出来たと感じています。

一方、活動する上での課題もあります。中でも重要な課題として、活動の意義を見失いやすいことが挙げられます。環境問題は根が深く、対症療法はできても、抜本的な解決には至っていません。ビーチクリーンや森林整備は特定地域の課題を一時的に解決できても、広範囲や恒常的な解決にはなっていないのが現状です。そのため広く環境問題という視点で見ると貢献を感じづらく、絶対的な活動の意義を見失うことがあります。もちろん自分たちの身の回りから課題解決をしていくことは必要で

あり、それらは今後も続けていきます。しかし、現状維持ではなく、活動の一つ一つの目的や意義を明確に理解し、更に影響力を高めるために活動内容を改善していく必要があります。よって、今後は環境問題への学習を本格的に行い、より多角的に、影響力をもった活動を実践していく方針です。そして、将来仕事として環境問題の構造的改革に取り組める人材を輩出することを目指します。

ただし、課題はあれど、私たちの活動、並びに大学生が環境ボランティアを行う意義は確実にあります。やまなびの遠征地である長柄町では、人手不足や活動者の高齢化が問題であるというお話がありました。これは里山保全に取り組むどの地域でも共通のことです。大学生ボランティアという若い人手がいかに貢献するかは自明であると言えます。また、私たちが取り組む海洋ゴミ拾いにも多くの人手が必要です。これらの活動は、大学生の豊富な時間や周りを巻き込む力を存分に活用できる場であると考えます。環境教育やゴミ分別指導、環境に関する取り組みの発信も、大学生が行うことで、将来を担う若い世代に親しみを感じてもらいやすくなり、環境意識の醸成に繋がります。廃材のリサイクルも、若い感性と結びつくことで、斬新な商品化が可能です。このように、環境問題と解決方法は多岐にわたり、大学生が介在する余地が十分にあることが分かります。環境ボランティアを行い、その人口が増えていくことは、環境問題の解決、持続可能な社会に直結すると言えます。

次に、大学生がボランティアをやる意義について包括的に考えます。現在、日本のボランティアは若年層の参加率が低いことが指摘されています。これは現代社会でネットが普及し、家にこもっても外と繋がることができるようになったことで、内向きの世界が強固になっていることが1つの要因であると考えます。結果、視野は自分、すなわち内側に向き、自己利益や損得勘定などが選択の物差しとして重要視されます。それらの観点から見れば、ボランティアは自発的な無賃労働であり、利益がないと感じられるかもしれません。しかし、ボランティアは目に見える利益と同等、場合によってはそれ以上に価値のあるものをもたらします。それは自分の可能性、並びに自分たちの可能性です。私の場合、やまなびの活動である笹刈や竹の伐採で、活動前と比べ目に見えて整備された景色を見た時、少しでも里山の保全に貢献できたと感じました。この体験は、私に出来ることがあるという可能性とその喜びを与えてくれます。これは目に見える利益以外の物差しを持つことに繋がります。また、団体として取り組むことで、短時間でも劇的な変化を与えることが出来るようになります。実際、整備活動では短時間で、自分が思っていた以上に広い範囲を整備でき、見違えるほど開けた景色に感動することがよくあります。他人のため、何かのためという軸が、人を団結させ、大きな力を発揮するということです。実際、自己利益以外の物差しで活動を選択してきた多くの人、団体によって成り立っていたもの、成り立っているものが多くあります。やまなびで訪れる地域では多くのボランティアが集まり、保全活動に取り組んでいます。決して自然発生的なものではなく、皆が影で支え続けているから、それらの地域の緑はとても美しいのだと分かります。ただインターネットを見ているだけでは、表面的な事実を知ることが出来ても、そういった活動の苦労や重要性を知ることは出来ないと思います。私自身、自分で体験し、現地の方のお話を聞くことでしか分からない大変さや達成感があり、外側の世界に触れないと、支えている人の存在や本質に気づくことが出来ないことを実感しました。自分の物差しを問い直し、自分の行動の可能性を広げること、そして外の世界と繋がり、守るべきものを守り続けていくことが今の社会に必要なではないでしょうか。ボランティアという、多様な物差しを与えてくれる機会を通してそれは可能であると考えます。私たちはこれからもこの価値ある活動を、環境のため、他者のため、そして自分のためにやり続けます。



## 「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	上智大学
団 体 名	Summer Teaching Program Cambodia (STPC)

タイトル：カンボジアの未来をつなぐ2週間

Summer Teaching Program Cambodia（以下、STPCとする）では、毎年夏休みに上智大学外国語学部英語学科の学生が2週間カンボジア王国シェムリアップ州にあるワットチョー中学校を訪問し、そこで100人弱の中学生を対象に英語を教えるボランティア活動を行っています。夏の活動が終わると、秋から翌年の夏まで定期ミーティングを行って新しい授業の内容を考え、生徒たちが授業で使う教科書も毎年全てオリジナルなものを自分たちで作成しています。ミーティングでは授業案や教科書の作成だけでなく、メンバーが先生役と生徒役に分かれて実際に授業をするモデルティーチングも行い、改善点の発見や授業の精度を高めるために試行錯誤しています。今年で16年目を迎えたSTPCは、コロナ禍中の2020年と2021年にはカンボジアに渡航することができませんでしたが、2022年にティーチング活動を再開しました。2年間の空白のため、この年のメンバー全員がカンボジアでの活動は初めてで、手探りの状態で進めていましたが、今年度の活動は2年間の現地での経験を踏まえてより良い活動ができたと自負しています。

カンボジアの公用語はクメール語で、決してすべての子供たちが私たちとコミュニケーションを英語で上手にとれるわけではありません。第二言語どうしでの会話には苦勞することがあるのは事実ですが、英語を外国語として学び、現在英語教育に関心を持って大学で学んでいるメンバーで構成されているからこそ、英語を第二言語として学ぶ者の視点で授業作りができ、これが私たちの強みだと感じています。また、互いに理解しあおうと努力することでコミュニケーションの大切さを私たちも学んでいます。

2週間という限られた時間で私たちが彼らに伝えたいことは何より、「英語を学ぶ楽しさ」です。私たちの授業を通して、英語をもっと学びたいと思って欲しいと願いながら準備をしています。そのため、単語や文法など言語的側面だけを教えるのではなく、英語を使いながら何かを学ぶという内容を重視しています。今年の授業のテーマはScience、Music、Sports、Money、Cooking、SNSの6つを取り上げました。例えば、Scienceの授業ではペットボトル空気砲を使ってどの空気砲が一番強いのかを比較し、Musicの授業では毎日の朝礼で歌うSTPソングを深掘して歌の意味を学び、最後にはミュージックビデオを作ったりしました。カンボジアでは体育や音楽の実技科目が教育に含まれていない上、英語等の主要科目も大人数による詰め込み型の授業が中心となっているため、MusicやSportsの授業は生徒たちに新鮮な授業を展開することができました。

英語に加えて日本文化を紹介するために、日本のお祭り（Japanese Festival）や運動会（Sports Festival）などのイベントも行います。浴衣の着付け体験や射的、玉入れなどを体験してもらいました。また、カンボジア人中学生に自国の伝統文化に触れると同時に、私たちも彼らの文化を学べるように「スバエクトム」（影絵芝居）という古典芸能の一座を招いて一緒に鑑賞しワークショップも受けました。私たちの活動ではこのように文化交流の時間も大切にしています。彼らがより幅広い視野を持

ち、世界で活躍できる人材になるためには、英語力だけではなく異文化理解が必要不可欠だと考えているからです。彼らの国際的視野を養うという目的のもと、文化交流を行っています。

一方で、課題もあります。その一つが、生徒たちの英語の習熟度の差がある点です。100人近くいる生徒ひとりずつのレベルに合わせた授業を作ることは不可能ですが、この課題を解決するために、クラスごとに内容を少しずつ変えたり、授業を完全に理解できる子には難しい質問を試みたりと工夫しています。さらに、授業においていかれてしまう生徒が出ないように、一つの授業で、生徒30人に対して（サポート・メンバーも含めて）先生6人を目安に配置し、少人数制の授業を行っています。また、生徒たちに直接指導できる期間が短いことも課題です。年に1度の2週間という短期間での活動のため、私たちが帰国した後の生徒自身の「自主学習」が大切だと考えています。限られた時間と資源でよりインパクトを与えられるよう、彼らがいつ振り返ってもためになるような教科書づくりや記憶に残るような授業を意識して活動を行っています。

そんな私たちがカンボジアで英語教育をする意義は主に2つあると考えています。1つ目は、カンボジアの子どもたちに世界の広さを教えてあげることです。STPCのメンバーは全員英語学科ということもあり、英語の重要性を普段からよく感じています。英語のおかげで海外の人とコミュニケーションがとれるようになったり、将来の夢の選択肢が広がったりと、メンバーのほとんどの人生において英語が重要な役割を果たしています。カンボジアでは経済格差が甚だしく、学校に通えない子どもや中途退学してしまう子どもたちもまだ数多くいます。彼らが十分な教育を受けられなければ、就ける仕事は限られてしまいます。彼らにとって、STPCの活動は、夏の2週間、日本の大学生が英語を教えに来るといふ小さな出来事に過ぎないかもしれません。しかし、その2週間を通して英語学習に興味を抱き、学校教育を受け続ける動機となってくれば、ゆくゆくは観光客の多いシェムリアップ州で観光事業に従事したり、国を越えた仕事に就く人材になってもらえるのではないのでしょうか。実際、過去にSTPCの活動に参加してくれた生徒の中には、私たちの活動をきっかけに英語学習を進め、外交官や裁判員として活躍している生徒もいます。このように、彼らの視野を広げ、将来の選択肢を増やしてあげることが活動の意義の1つです。

2つ目は、活動の持続性です。私たちが一度に教えられるのは100人程度の生徒にしすぎません。しかし、今年で16年目を迎えた私たちの活動を通して英語を学んだ生徒たちの数はすでに延べ千数百人を数えます。このように、活動を長期的・継続的に行うことで少なからぬ影響を及ぼし、カンボジアの人々に対して貢献することができたと信じています。また、私たち自身にとっても、3年間の活動を通して、英語教授力が向上したり、カンボジアの人々と実際に交流し文化に触れる貴重な体験を通して価値観が変わったりと、成長することができます。活動の最終日に行われるお別れ会では、メンバーも生徒も目に涙を浮かべながら「See you again.」ということばを交わしてお別れをしますが、このことばは単なる別れの挨拶ではなく、これからも活動が持続していくことができるようにという願いが込められています。

16年間続いてきたこのSTPCの活動をこれからも続けて発展させ、カンボジア人と私たち日本人の絆が途切れないようにすることに意義があります。私たちの活動がこれからもカンボジア生徒たちの明るい未来をもたらすことを私たちは心から願って日々活動に励んでいます。

## 「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	東北大学
団 体 名	東北大学陸前高田応援サークルぽかぽか

タイトル:「東日本大震災から 13 年、今もなお『被災地』支援ボランティアに取り組むのはなぜか。」

「東北大学陸前高田応援サークルぽかぽか」(以下「ぽかぽか」とする。)は、東日本大震災の被災地支援を行う東北大学のボランティア団体として、2013 年に発足した。そしてその名にある通り、団体を発足して以来ずっと、岩手県・陸前高田市を活動の拠点としている。陸前高田市は、東日本大震災によって大きな被害を受けた「被災地」である。

震災発生から 13 年、陸前高田市はその間絶えず変化・進歩してきた。その結果、道は整備され仮設住宅は解体し、中心市街地には新たなシンボルとなるような商業施設が建った。「被災地」と聞いてイメージするような街並みは、見られない。それは他の被災地においても同様で、それに伴い東日本大震災の被災地支援を行うボランティア団体の数も減少傾向にある。

しかし、我々ぽかぽかは、被災者のメンタルケアを行う足湯サロンで活動をスタートして以来 11 年間、移り変わる地域の現状に合わせてさまざま形を変えながら、陸前高田市での活動を続けてきた。なぜ、そこまで陸前高田市での活動にこだわるのか。以下では、まず陸前高田市の現状と課題、それに対する我々のアプローチについて説明する。そして最後に、震災から長い年月が経過した“今”、ぽかぽかが「被災地」陸前高田市で活動を行う意義を明らかにしたい。

### 1. 被災地・陸前高田の現状と課題

先にも述べた通り、現在の陸前高田市の「復興」は、一見ほとんど完了したように見える。しかし、目に見えない部分において、その被害は未だ存在する。我々が問題視するのは「地域コミュニティの希薄化」と「若者世代の不足」である。

まず「地域コミュニティの希薄化」とは、被災による複数回の住居移転を背景に生じた課題である。被災で住居を失った人々は、〈避難所→仮設住宅→災害公営住宅〉というように、複数回の転居を強いられた。そのため、もともと暮らしていた土地で形成されていたコミュニティは崩壊し、安定したコミュニティを築く機会もなく、地域住民は孤立するようになったのである。この課題は被災直後からあるものだが、近年はコロナ禍の影響で深刻化し、今なお現存する課題である。

続いて、「若者世代の不足」は、被災が原因の人口流出によって地域の過疎化が進行したことで深刻化した。この問題は現在、直接的には「地域伝統行事の後継者不足」という課題、間接的には「子どもの思い描く将来像の制限」という課題<sup>1</sup>のような、二次的課題を引き起こしている。

以上から、現在の陸前高田市には目に見えない潜在的課題が複数存在し、いずれもある程度の深刻さを伴う課題であるということがわかるだろう。

---

<sup>1</sup> 若者不足とはすなわち「大学生」の不足につながる。加えて、陸前高田には大学がないため、必然的に大学進学を行うロールモデルが地域にいないということになり、子どもたちが大学進学に対し具体的なイメージを描くことは難しく、結果として将来の選択肢に制限がかかってしまうのである。

## 2. 課題へのアプローチ～活動の効果と課題～

以上のような問題分析のもと、現在ほかほかは「仙台に住む大学生」が行える支援として有効であろう、以下の3つの活動を行っている。(活動内容・効果・課題についてそれぞれ説明する。)

### ① 災害公営住宅での交流サロンの開催→「地域コミュニティの希薄化」へのアプローチ

災害公営住宅に暮らす高齢者を対象に、手芸会や食事を開催する。これにより、住民である高齢者が自分の部屋から出るきっかけ、そして住民同士の交流、さらには大学生との交流の場ができる。

\*課題：ある程度開催を重ねる中で参加者が固定化されつつあるため、コミュニティのさらなる活性化・拡大のためには、多様かつ大人数の参加者の確保が必要である。

### ② 地域伝統行事への参加・支援→「地域伝統行事の後継者不足」へのアプローチ

陸前高田市の伝統行事「動く七夕まつり」「和野権現舞」の開催を支援する。山車の曳き手や権現舞での演者役といった若手の仕事を我々が担い、地域にいない若者の代役を務めることで、地域の伝統行事をこれまで通り開催することができる。

### ③ 子ども向けのイベントの開催→「子どもの思い描く将来像の制限」へのアプローチ

地域の小・中学生を対象に、工作や運動会などのイベントを開催する。また地元の高校生と共同開催で行う場合には、企画打ち合わせ中の雑談で高校生の相談に乗るなど、高校生と大学生の交流も生まれる。すなわち、イベントの企画から開催にかけて、地域の小・中・高生へ大学生との交流の機会を創出する効果がある。

\*課題：②・③に共通して、現時点では我々が陸前高田の若者の「代役」を務めているに過ぎず、根本的課題解決(若者の増加)には至っていない。

## 3. 今、ほかほか「被災地」支援を行う意義～学生・地域支援型ボランティアにできること～

最後に、“今”のほかほかは、陸前高田市という「被災地」の支援へ取り組むことの意義を、「学生ボランティアとして」/「地域支援型ボランティアとして」という2点から論じ、結びとしたい。

まず「学生ボランティア」として取り組む意義は、「社会が後回しにする問題を取りこぼさない」という点にある。前述の通り、現在東日本大震災に対する被災地支援の優先度は低い。なぜなら、ボランティアにも「トレンド」があるからだ。例えば、企業の社会貢献事業として行われるボランティア活動であれば、そこには企業広報の役割が包含されるため、話題性・即時的効果が重要となる。したがって、どうしても世間の注目度の低い課題・手間のかかる課題は後回しにされる。一方、学生ボランティアではそのような二次的役割を考慮する必要がないため、話題性・即時性を考慮する必要がない。したがって、社会が後回しにする課題へも手を差し伸べることができるのである。

次に、特定の地域で活動を行う「地域支援型ボランティア」として取り組む意義は、「地域との信頼関係を築き、地域に寄り添った支援ができる」という点にある。ほかほかの活動が足湯から始まってサロン交流会・子供向けイベントへと変遷してきたように、活動拠点を軸とする地域支援型のボランティアは、移りゆく地域の状況とニーズに合わせて活動内容を柔軟に変化させ、その地域と関わり続ける。その過程で、地域に住む人々との信頼関係を築き、その地域の「一番の理解者」となるのだ。

東日本大震災から13年が経過した今、東日本の被災地支援の必要性は叫ばれなくなった。しかし、必要性を訴える声が小さくなったことは、必ずしも支援が必要とされなくなったことを意味しない。我々「東北大学陸前高田応援サークルほかほか」は、震災から何年経過しようとしてそこに解決すべき課題がある限り、「陸前高田市の一番の理解者」を目指してボランティア活動を行い続ける覚悟だ。